書評

河内　重雄　著

『日本近・現代文学における知的障害者表象　私たちは人間をいかに語り得るか』

橋本　明

本書は、著者が明確に述べているように、第一章の「國木田獨歩「春の鳥」論」から第六章の「青来有一「石」論」で、おもに文学作品を通して知的障害者（白痴者、精神薄弱者）がどのように語られてきたか、どのような方法で人間として描こうとされてきたかを通史的に考察した意欲的な論文集で、九州大学に提出された博士論文を加筆訂正したものである。

では、時間の経過とともに、知的障害者表象にどのような変化が現れたのだろうか。著者の論旨を私なりにまとめると、理性と意志に価値をおく近代的思想のもとで、理性と意志を欠いた「非人間」として描かれてきた知的障害者を、近代的思想の呪縛から解放された「人間」として描くことへの変化である。あるいは、知的障害者（周縁）／健常者（中心）という堅固に見える二項対立関係を揺るがし、この周縁・中心関係をときには逆転させ、知的障害者／健常者という二項対立を超えた多様な中心を想定して描くことへの変化でもある。著者はそのために、明治から平成にかけての各時代を映し出したいくつかの文学的表象を適切に選び出し、各時代の学問的トレンドなどにも目配せをしながら、それらを丁寧に分析している。「知的障害者表象」という切り込みが、文学作品に新たな解釈を与える可能性を示すことに成功している。一方で、著者が自らの研究を「知的障害者の差別問題に関わる様々な議論を、言葉の問題として考える文学研究」（傍点は橋本による）と規定することで、むしろ文学研究の領域を超える試みであることが露呈している。本書の各所で読みとれるのだが、知的障害者をめぐる望ましい社会変革（教育等の社会制度の見直し）をも視野に入れるという「実践家」の一面もぞかせていることは興味深い。

まずは、各章の内容を順に紹介したい。なお、章タイトル内の作品名につづくカッコ内の年代は、私が書き加えたものであ

る。

第一章は國木田獨歩「春の鳥」（明治三七年）を論じている。小説の中で、語り手である学校教師の「私」は、小学校を退学させられた「白痴」の六蔵の意志を翻訳（言い換えると、人間として理解）しようと試みる。だが、結局のところ翻訳者としての「私」の試みが失敗に終わり、「白痴者」の意志を切り捨てる（つまり、「白痴者」を非人間として捉える）科学者としての「私」のまなざしが勝利したと読み解かれる。「白痴者」はその理性や意志を教育によって伸ばすことができない、社会に害をなす非人間的な存在であるという言説が支配的だった時代にあって、作者の獨歩は「春の鳥」を通して科学的・実証主義的な視点のもつ暴力性と同時に、「白痴者」の意志を理解するという翻訳行為の困難性を示したのではないかという。

他方、第二章「芥川龍之介「偸盗」（大正六年）論―「白痴」の女が母になることの意味」では、この小説が第一章とほぼ同じ時代背景をもちながらも、意志をもたない、善悪の判断ができない「白痴者」という言説をむしろ有効に活用していることを指摘する。すなわち、理性や意志という知的な側面をもたない「白痴者」をこそ、「一切の悪」から解放された普遍性をそなえた真の人間として描くことが可能になるという逆転である。著者はさらに、「偸盗」の語り手が、「白痴」の女、阿濃の内面をわずかながらも語っている点で、「春の鳥」の語り手の一歩先に進んでいると、評価している。

第一章および第二章では、あくまで理性と意志を議論の前提とした「白痴」をめぐる人間・非人間論だったが、続く第三章「石井充「白痴」（大正十五年）論―農本主義的な生き方と「白痴」」では、小説「白痴」が理性や意志をのばすことと関わる教育への疑義を提示する農本主義の立場から、一途に農作業に歓びを感じる「白痴者」的な生き方を肯定的に語っていると述べる。だが、同時に学校教育というイデオロギー的国家装置に批判的であるという点で、農本主義がとらえる「白痴者」はマイナーで対立的なイデオロギーにならざるを得ないという限界についても指摘する。

第四章「山下清の語られ方―知的障害者を「天才画家」とすることについて」は、一つの文学作品を扱っているわけではない。昭和三十年頃、「日本で初めて、そして最も、知的障害者の発言、作品が、社会的に意義や価値をもつものとして認められた時期」の山下清をめぐる表象である。ただ、この背後には精神科医・式場隆三郎（本文中に「国立国府台病院」の院長であったと読めるくだりがあるが、これは誤りである）の存在があり、彼の目的は「精薄児」の教育可能性を世間に信じさせることにあったと。だが、山下清という現象が、「天才画家」どころか、やがて「式場隆三郎と新聞社が作りあげたお粗末な芝居だった」と語られ、ドラマのアイドルとして消費されてしまう末路が描かれている。

第五章「大江健三郎『静かな生活』（平成二年）論―知的障害

者も共に生きる社会のモデルの考察」のサブタイトルが示すように、テーマは一気に現代的な言説空間へ入り込む。知的障害者と「共に生きる」という障害者福祉分野のノーマライゼーション・リハビリテーション概念に寄り添いながら、この作品から二つのモデルが読み解かれている。一つは、障害児の親になるという「「最大の危機」から「障害の受容」へ至ることでイーヨー（知的障害者）が周縁から中心へと移る」というモデルであり、もう一つが、「イーヨー（知的障害者・周縁）による自己表象を、中心である周囲の人々・健常者が受け入れることで、周縁に位置付けられた者が中心へと移るというモデル」である。このような手続きを経て、表象される知的障害者、表象する健常者という権力構造をともなった二項対立の解体が試みられている、ということだろう。

また、知的障害者（周縁）／健常者（中心）という固定的な捉え方の解消に関わる第五章の議論をさらに展開させたのが、第六章「青来有一「石」（平成十七年）論―なぜ驚異的な記憶力をもつ知的障害者が語り手なのか」である。著者は小説「石」で描かれた、サヴァン症候群的な記憶力をもつ知的障害者、フラッシュバック的・集合的な記憶と深く結びついた長崎の被爆者およびキリシタン、という一見無関係な三者が「回帰し続ける鮮烈な記憶」という共通基盤に立っていることを強調する。さらに、知的障害者／健常者という関係を固定化させた近代的な「意志」に代えて、回帰する「記憶」を言葉相互の関係の中心に据えることで、従来の人間の捉え方が変化していく可能性を示唆している。

終章では第六章までのまとめと、近代的な人間・知的障害者観を超えるべき著者のいわば実践論が語られている。いくつかをピックアップしてみると、「健常者／知的障害者という、近代的な語彙における言葉相互の関係を前提とすることをやめる必要がある」。さらに、「知的障害者概念や人間概念のラディカルな変化、諸制度や思考の変化につながる文学作品・批評を、そんなことは無理だと諦めることなく、生み出そうと試み続けることが重要と考える」ことに関わって、「知的障害に関する記述を含む作品・事項一覧」を作成したのだという。ページ数にして本書の後半の半分以上を占めるのは、明治初年からはじまって平成二十三年までの作品・事項を網羅したこの一覧である。労作と言うべきだろう。

このように、知的障害者表象の新しい解釈に満ちた、とても刺激的かつ読みごたえのある本である。と同時に私は、著者のプロジェクトに敬意を払いつつ、ある種の「戸惑い」も感じた。最後に私の「戸惑い」について少し述べてみたい。

まずは単純な話から。「日本近・現代文学」と「知的障害者」と「表象」という組み合わせが、どこかぎこちなく響く。一九九〇年代に当時の厚生省が中心になって作った、典型的な人権配慮型行政用語と思われる「知的障害者」を用いて（著者も述べているように、医学的には「知的障害」ではなくもっぱら「精神遅滞」

が用いられている）、明治期までの文学作品を包含すること、さらに、その行政用語に文学的な「表象」という語句を接続させることへの違和感がある。障害児・福祉関係者への無用な配慮や、「言葉狩り」に備える過剰な譲歩（著者は「言葉狩り」の不毛さについても言及しているが）を嗅ぎとってしまうのは私ひとりだけだろうか。ただし、これは単に著者と私の間の「知的障害者」という言葉の定着度、あるいはこの言葉の生成・受容過程、にかかわる認識的なズレに過ぎないのかもしれない。

だが、私の「戸惑い」の本丸は、単なる言葉のミスマッチ感覚以上のものである。「知的障害者」という表象が最初から内包している社会改革・社会運動論的な偏向への疑念とも言うべきか。あるいは、一九五〇年代のデンマークに端を発し、北欧・北米諸国、国連などを経由して、わが国の障害者基本法（一九九三年）の基本理念としてオーソライズされているノーマライゼーション・イデオロギーに「汚染」された表象への「無駄な抵抗」感覚と言い換えてもいい。「白痴者」を論じている限りは、近代文学的な表象を分析する世界で安住していられただろうに、著者は「知的障害者」と名指した瞬間から、好むと好まざるとに関わらず、狭義の文学研究者の枠をはみ出して、社会変革を展望する「実践家」の役割を担わざるを得なくなったのだと邪推する。それ故に、当プロジェクトの目的として、「知的障害者の差別問題」の存在を疑う余地のない前提とした「知的障害者概念や人間概念のラディカルな変化、諸制度や思考の変化につながる文学作品・批評」を「生み出そうと試み続ける」という、社会への働きかけを挙げるのではないかと。それ故に、著者が「近代的な語彙における言葉相互の関係（＝近代的思考）を脱し、言葉相互の関係のあり方や言葉の諸概念を再構築し（中略）そして諸制度を作り替え」る、という実に壮大ではあるが、社会科学的には直ちにリアリティを持って受け止められないかもしれない社会変革の手続きの一端に触れる破目になったのも、必然ではないかと。

もっとも、著者はむしろ「実践家」でありたいと強く望んでいるふしがある。著者が今後の課題の一つとして挙げる「知的障害者を表す言葉以外の通史的な整理と分析」をも手掛けることで、私の「戸惑い」など易々と突き崩すようなスケールの大きい、かつ（著者も「序章」で述べている）「危険」な知的障害者表象プロジェクトの次なるステップを展開させることを期待したい。

（二〇一二年三月二〇日　九州大学出版会　三九五頁　本体六六〇〇円＋税）